

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

### 長寿の人

彌兵衛は、岩の上に座ると静かに目を閉じた。  
——わしは、少し疲れているのかもしれない。

彌兵衛は、このところ、ときどき酷く気持ち  
が落ち込み、自分でも気付かぬ間に手を休め、  
ぼんやりしていることが多かった。

——川の水音が聞こえて来る。力強い音じゃわ  
い。——

彌兵衛はそっと目を開けた。

今度は、はっきりと河原に二つの影が見えた。  
娘の方は彌兵衛に向かって懸命に手を振って  
いた。青年は岩をよじ登っているところだった。  
彌兵衛を迎えに来たのだ。

「おじいさま——。おじいさま——」

河原に下りた彌兵衛は、薄汚い身なりだった。  
つるは、そんなことはお構い無しに彌兵衛を抱  
き締めた。

迎えに来た青年は猪之助。つるの許嫁であっ  
た。

享保十三年（一七二八年）、大庭村・荒木勘  
兵衛の三男猪之助とつるは祝言を挙げ周藤家へ  
入った。つる十七歳の歳であった。

彌兵衛は

「神さまや仏さまは、人間にあらゆる苦しみを  
お与えになるが総てを奪ったりはなさらないも  
のだ。僅かな希望の光を必ずお与え下さる」  
と、花嫁姿のつるを眺めて呟いた。

日吉の切り通しの工事は、彌兵衛の孫の代で  
若い力を投入し、目に見えて進展し、彌兵衛九  
十六歳の春に完成した。



画 高田勲

### エピソード

彌兵衛は百二歳を迎えていた。

このころでは外に出ることも少なくなり、床  
に就いている時の方が多くなっていった。

彌兵衛は、ふとんに入り庭の梅の木に降り積  
もる雪を眺めていたが、やがて、うとうとと眠  
りに就いた。彌兵衛は夢を見ていた。

祖父の家に抱かれて、意宇川の水を見つめ  
る彌兵衛と、流れの変わった新川を勢いよく流  
れる水の音に、村人たちが歓声を上げる。

そんな場面である。

彌兵衛は幸せだった。

彌兵衛の顔に苦しみの色は無かった。

百と二年の人生を終えて、彌兵衛は安らかな  
眠りに就いた。この時代では稀に見る長寿の人  
生だった。

(了)